

炉辺医話(11)0202 パラオ共和国

パラオ共和国との出会い

わたしがまだ東京女子医大に勤めていた1999年10月にパラオ共和国を訪れることになりました。もちろん、それには先行する話があります。実は、広島県尾道市にパラオ協会というのがあって、会長の橋上正樹先生が中心になって、尾道クリニックの浜口直樹先生らがパラオ共和国の医療、とくに腎不全患者の透析関係の医療を、いってみれば草の根運動的に支援していたのです。ほかの分野での支援もしていたはずですが、わたしの判る範囲だけのことだけを述べます。国内の学会活動を通じて浜口先生と知り合いになり、わたしの立場でなにかお手伝いすることができないか、それには一度パラオに行ってみなければということになったのです。実はが重なりますが、実は、1998年に、中国新疆ウイグル自治区へいったことがあります。これも、

群馬県の先生方が当地の透析医療を支援していて、ひょんなことから会長をしていた国際難病治療支援研究会を通じて ODA (Official Development Assistance) から透析液原水処理装置を供与したときの贈呈式に出席したのです。このような国際協力が、あちこちにあることは、もっと社会的に評価を受けていいことだと思います。

パラオの現況

話をもどって、パラオですが、この話がでるまで、名前は知っていましたが、どこにあるか知りませんでした。地図を拡げると、フィリピンの右（東）にある島々からなる国だということが判りました。人口は、約 16,000 人。その後、いろいろな情報が入ってきました。当時の大統領は、Nakamura という日系の名前をもった方でした。年輩の方は、知っておられるでしょう。第二次世界大戦（太平洋戦争）が終わるまで、日本の南洋庁があった

ところでは、最近では、ダイビングなどのマリンスポーツの人気スポットがあることで知られています。終戦後、国連の信託統治となっていました。数年前に、国民投票によって独立国となりました。国連からの直接的経済支援がなくなって、ほかに産業もなく、国としては観光立国を目指しているのです。果物などを扱う一次産業立国を試みたこともあったそうですが、バナナなどの果物は売り買いするものでなく、庭からもいできて食べるものとの感覚から市場が成立しないと聞きました。自立・自由は、しばしば別の不自由、ときには経済的な不自由をともなうのです。小さな国ですから、航空便が不便です。グアムからの飛行時間は、1時間ちょっとですが、接続が悪く、日本からはまる1日かかるつもりで行かなければなりません。現地の人たちは、観光客を招きやすくするために日本から直行便がくることを希望していますが、彼らには悪いけど、今のままの方が

パラオらしさが保存されるのではないかと思われます。

生活習慣急変病

これから述べることは、現地の医療関係者との話などをまとめたことなので、内容的には少し不正確な点があるかも知れません。終戦まで、日本人と海洋民族のパラオの人たちは、タロイモと海産物中心の食生活をしていました。おそらく数千年～数万年にわたっての食習慣だったと考えられます。国連の信託統治となって、栄養学的にそんな貧しい食生活ではだめだと、肉食の食事が持ち込まれたとのことです。約 50 年たって、住民の約 25% が糖尿病だといわれています。そのほか、高脂血症・胆石症・高血圧症など、いわゆる成人病、あるいは生活習慣病といわれるものが急激に増えたというのです。わたしは、この生活習慣病というネーミング（名付け方）は適切でなく、生活習慣急変病だと考えてい

ます。そのことは、また別の炉辺医話に書くことにします。

それで、糖尿病性腎症から腎不全となり、わたしが訪ねた時点で、十数名の透析患者がいました。人口千人当たり一人以上ですから、ほぼ日本並みです。国立病院は、数十ベッドのかわいらしいサイズです。医療は、基本的に公費によると聞きましたから、大変な負担です。

パラオの自然と食べ物

パラオの自然環境は素晴らしいという言葉に尽きます。海がきれい、島がきれい、空がきれい、空気がきれいです。きれいばっかりです。景色は、本当に目が洗われた感じで澄んで見えます。スコールがくるので、一日に何回も虹が見られます。食べ物では、ロブスターでなく、ひげを除いた長さが50cm級の伊勢エビに似た五色エビの刺身が食べられます。これは、大統領に誘われて、東京の居酒屋

屋級の日本食レストランで食べたのものです。ついでに土地の珍味として、ワニのステーキ（！）とコウモリのまるゆで（？）ができました。ワニは、鶏肉より軽くてまあまあ、果物だけ食べるといわれるコウモリは、果物の香りがするといわれましたが、顔が犬そのままなので口に入れられずパス。魚の刺身はふんだん。ピクニックに行こうと誘われて、モーターボートで島に渡りました。一応、食材はもって行くのですが、釣った魚でBBQ、長い竿で椰子の実をつついて落とし果汁をすするスタイルです。こんなのって大好き。タロイモを何時間もかけて茹でたのを食べましたが、あまりおいしくない。焼いたらいいんじゃないのと、アルミホイルに包んで蒸し焼きにしたら、マーマー。最近のパラオの若い人はタロイモの料理の仕方を知らないようです。

パラオへ移住？

東京女子医大を定年退職するときに、パラ

オに移住しようとして提案したのですが、妻に、あっさり「独りでどうぞ」といわれて、あえなく破談。しかし、いつかはと、機会を狙っています。

後日談があります。Nakamuraさんは、大統領を2期勤めて退任されました。そこで、2000年11月に天皇陛下がご苦労様でしたと、日本にお招きになりました。赤坂の迎賓館にお泊まりになられたのです。その折りに、思いがけずわれわれ夫婦が大統領に招かれて迎賓館で食事をしたのです。ラッキー。そのときの外務省担当官からの電話では、「お車で来られるでしょうが、お車の種類と運転手の名前を前もって教えてください」とのことでした。機密費でお出迎えではなかったのです。だけど、車はO.K.。退職金でジャガーを買ったばかりでした。だけど、「運転手の名前は、阿岸鉄三です」。当日になりました。迎賓館の近くまで行って、さすがのわたしもビビりました。だって、迎賓館近くのすべての電柱(?)に

は、日の丸とパラオの国旗がバツテンになって飾られているのです。内部の装飾は素晴らしく、豪華なシャンデリアの下で記念写真を撮ってきました。大統領の奥さまは、それこそ糖尿病由来の透析患者でしたので、滞日中にわたしたちの病院で透析をうけられました。

大統領就任式に出席

まだあるのです。2001年1月19日の新大統領の就任式に招待されました。妻と二人で、「こんなことは、一生に二度とはない。それ行け」です。往きの飛行機で、プロレスの猪木さんと一緒になりました。かれは、周囲25 km の、ご自分の名前のついた島をパラオから贈られているとのことでした。就任式は、首都のベースボールグラウンドにテントを張って会場とし、明るく、伸びやかに、そして厳粛にとりおこなわれました。このときの国歌演奏が素晴らしかったのです。高校生の男性コーラスで、島々にさざ波が打ち寄せるイメ

ージとの説明がありました。癒し系の音楽です。ついでながら、国旗は、日の丸の旗と柄が同じで、日の部分が黄色、地がブルーで、月と海を象徴するものとのことでした。妻には、「でっかい伊勢エビの刺身が食べられる」と誘ったのですが、空振りでした。就任式のパーティ用に数週間前から買い占められていて、個人の食卓には上らなくなっていました。大体、そんな大きな五色エビは、いつも簡単に口に入れることができるのではなかったのです。前回は、大統領と一緒にだったので食べられたことのようにです。そのパーティは、ハワイなどにあるリゾート級ホテルの庭全部の貸し切りで、篝火のなかで開かれました。篝火も癒し-古代への復帰希求です。このホテルでは、昼間にせっせと椰子の実を落としていました。お客さんの頭を直撃しないようにとの配慮です。近隣の島々から南国の歌と踊りが披露されました。

現代の蓬萊へは、近いうちに絶対また行き

ます。でも、糖尿病には気を付けなきゃ。。。

またまた独立記念式典へ出席

と、ここまでは、2001年8月頃書いたのです。近頃は、正確には、原稿は打つものですか？パラオ再訪が実現したのです。9月26日になって、突然、10月1日の第7回独立記念式典に出席するようにとのご招待がきました。庶民は、大統領のお誘いを断ることはできないのです。だけど、こんなにせっぱ詰まってお誘いは、パラオスタイルですか？

いそいそと準備を始めましたが、行きは間に合うのですが、帰りの飛行機は10月6日まで満席で、1週間、南の島に島流しです。運が悪いか、良いか。シメシメ。一週間の島流しで、現地の人と同じように褐色の肌となって帰りました。

挿し絵

ホテルのフロントから見た夕日。建物の吹

き抜けは、普通、縦方向に天井が抜けていることだと思いますが、このホテルは、縦も横も吹き抜けています。ちょうど建物の作りが海を描いた絵の額縁のようになっているのが気に入りました。見たこともないような大きな夕日、海も空も大地も、全部が茜色に染まり、荘厳な気分になります。浄土は、西方にあるのが確信される瞬間です。